

01 作品ナンバー 01：「黒電話ボックス」

(牛島くんに教えていただいた作品。)
これは”マトリックス”への唯一の通信手段である黒電話なのか・・・
(この黒電話がいきなり鳴り出したら怖いですね。)



02 作品ナンバー 02：「壁泉の少女」

聞くところによると、農学部力がつよかったとのこと。
むかしむかし、ここが農学部力の象徴だったかもしれない壁泉のある水場。
時に力の象徴は余力がなければ造ることのできない周辺施設に現れる。
力の衰退と共に、周辺施設から維持管理ができなくなり廃墟化していくのが世の常ですね。
(財政難の中で公共施設がそのような状態に陥ってきています。)
はたしてこの壁泉から水が出ていたのはいつ頃だったのでしょうか？
もしかするとこの水場の奥には何かしらの西洋式庭園みたいなものがあったのかもしれない。
そもそも何のために、どういった経緯で作られたのでしょうか？想像するとおもしろい・・・



03 作品ナンバー 03：「農学部消火栓」

聞くところによると、農学部力がつよかったとのこと。
むかしむかし、これが農学部力の象徴だったかもしれないし、特注だった昔は普通のことだったのかもしれない。
(はたして「工学部消火栓」「理学部消火栓」などあったのかな？(笑))
鋳物製の消火栓は趣きがありいいですね。昔の鋳物製品の多くは、時間経過とともに機能性は落ちていきますが、オブジェとしてみた場合、経年変化による劣化が必ずしも価値を落とすわけではなく、このように大変趣きのあるオブジェへと醸成され、みるもののノスタルジーをかきたててくれます。



04 作品ナンバー 04：「ゲッチンゲン風洞実験室看板」

小さい看板なのですが、どうしても目に入ってしまう異質なオーラを放っている看板です。言葉の特性、おもしろさですね。手書きの感じもいいです。ゲッティンゲンではなくゲッチンゲンなのもいい。「風」が旧字体なのもいいですねえ～(時を超えて様々な想像をかきたててくれる)笑
この看板何代目なのでしょう。見た目の状況を見ると建設当時のものではないと推測されます。(どうでしょう)



05 作品ナンバー 05：「後付ダクト」

ダクトファンのみなさまお待たせいたしました。笑
研究室に排気設備が必要となった場合、なかなか厄介なことが起きます。
排気経路をどのように確保し、排気設備をどこに取り付け、排気開放位置をどこにするのか・・・などです。
もともとの建物がRCラーメン構造で柱・梁以外は窓になっているので、外に排気するには、窓部分を使うしかありません。ガラスを丸く繰り抜いてダクトを取り付けるのは大変なので、ガラス一枚を金属パネルなどに置き換えて、金属パネルを丸く繰り抜きダクトを取り付けます。次に排気開放位置ですが、窓の部分で排気してしまうと、上階に部屋がある場合、上階に部屋に排気物質が入ってしまうことも考えられます。排気開放位置を既存の部屋に影響のないようにするには屋上まで持っていかなければならず、結果このような写真のようになります。(まちなかの焼肉屋さんや焼き鳥屋さんの排気ダクトを観てみよう！笑)
これらの排気ダクトは、単に機能面だけを考えて取り付けられていますが、この写真のようにある程度の規則性とランダム性、継ぎ手の色の違いと曲がり具合、無骨な建物に取り付け即物的であるが生物的、生命感を醸し出すダクトは感性を刺激してくれます。



06 作品ナンバー 06：「量子線照射分析実験施設」<放射線管理区域>

放射線管理区域に「量子線照射分析実験施設」がありました。
窓が一切ないコンクリートの塊の建物です。窓が一切ない建物って、なぜか不気味な印象を受けますね。
「放射線管理区域」のマークがさらに不気味さを増幅しています。1階部分を見ると、柱が異常に太く、数が多いのがわかります。それだけ重い装置が設置されていることが想像できます。一体どういった実験装置があるのでしょうか？どんな実験をして、何がわかるのでしょうか？



07 作品ナンバー 07：「電源トランス（変圧器）」

変圧器ファンのみなさまお待たせいたしました。笑
施設といえば良質な電気がつきもの。キャンパス内には、ところどころに電源トランス(変圧器)が無造作に設置されています。
機能のみの要求から作られたであろう、この独特な意匠は、なぜか(隠れ)ファンが多い。
電柱、トランス、電線、一体これらは何なのか？
“昼”と“夜”で評価が真っ二つに割れ、評価が揺らぎ始めている・・・



08 作品ナンバー 08：「煙突」

煙突ファンのみなさまお待たせいたしました。(忘れていたわけではありません笑)
実験施設といえば、高温な気体を室内から外部へ排気する設備”煙突”が必要であることも多々あります。建物の設計段階から計画されていれば、建物の一部としてデザインされます。後で必要になると、取ってつけたような後付煙突が唐突にあらわれてしまいます。
「疑惑」
まち歩き時に一つの疑惑が持ち上がりました。
この煙突は、実験施設と見せかけて、実は中でピザを焼いているのではないのか？
・・・そう、“実験施設偽装ピザ窯疑惑”です。糸島キャンパス移転の遠因なのか！
煙突にはいろんな側面、意味があり、簡単に良し悪しは判断できませんが、引きつけられる魅力があります。



09 作品ナンバー 09：「樋」

“樋”ファンのみなさまお待たせいたしました。(“樋”ファンには会ったことがないのですが・・・笑)
この建物をみると、既存外壁をすべて新しい外壁で包んでしまうという大規模改修をおこなっているようです。よくみると、新しい外壁面のアルミサッシの奥に、もう一つのサッシが見えますね。これがもともとの外壁の位置だったのでしょうか。
半地下の構造となっている中で(60年代頃(?)までは半地下の構造が近代建築ではよくありました)、2階へのアプローチはスロープとなっています。(現行のバリアフリー新法や福祉のまちづくり条例では、高齢者、障害者等の移動用のスロープとは認められない急勾配ですが、デザインとしては大変魅力的ですね)
そういったことをいろいろ考えているなかで、オーバーハングしている上階下の軒天から一本の“樋”が落ちてきているのを発見しました。軒天から落ちてきた樋は、半地下の底まで行かず、ドライエリア部分にH形鋼の鉄骨梁が架けられ、その上を樋が走り、建物周辺のGL高さの上で排水処理されていました。
「苦肉の策」
雨水が半地下まで下がってしまうと、処理がうまくいかない状態だったのでしょう。
苦肉の策として改修時にこのように判断したようです。
改修工事の難しいところです。(本当に大変です)
(もしかすると、新築当時の樋は、内樋(建物内に樋を通す)だったのかもしれません)
ということで、このような”樋”ができた想像しています。



10 作品ナンバー 10：「廃墟」

”廃墟”ファンのみなさまお待たせいたしました。(”廃墟”ファンは多いですね。笑)
九大箱崎キャンパス内にも”廃墟”がありました！
隣の建築関連の実験施設のような気がしますが一体何の施設なのでしょう？いただいた配置図にも書いてありません。
つまり、「残すか／壊すか」、という選択肢にもあがらない対象外の構築物ということです。
”昼の世界”＝”表通り文化”では。
“路地研”の私が”路地裏文化”(＝”夜の世界”)側からワンダー的視点でみると、すばらしい～。笑
見どころ
1、むき出しの鉄筋コンクリート造の柱とハンチ付梁
2、すでに残っていない屋根材、屋根材を支持していた垂木材の劣化。一部変形、脱落。
3、汚れた壁のスレート材と絡まる枯れた蔦
4、適当に壁を塞いでいる、カラー鋼板の小波板と塩ビの小波板。
一部破損、脱落、サビ、汚れ。
5、使用してた時の残骸であるアンテナ。(この施設の用途は?)
などなど・・・

隣のスレート壁の建物にも蔦が絡まっていますね。
その隣の建物の外部階段が、いい具合に劣化し、手摺が崩壊、廃墟のイメージを盛り立てています。階段の間からのぞく”木”がなんといってもすばらしい。廃墟と植物はセットでイメージが増幅されます。



11 作品ナンバー 11：「腐食と侵食」

”鉄サビ”ファンのみなさまお待たせいたしました。
そして、“植物侵食”ファンのみなさまお待たせいたしました。
豊かな暮らしを支えている人為的還元作用(＝文明)を、じわじわ破壊していくのが”サビ＝腐食”ということか。
鉄骨階段の奥に見える半地下部分から、木が生えて大きく成長しています。建物(＝文明)を侵食してゆく植物ですね。
前回”廃墟”で「廃墟と植物はセットでイメージが増幅されます。」と書きましたが、なぜこのセットがイメージを増幅させるかといえば、一つには、人為的文明力を自然の力が”腐食”、“侵食”してゆくために必要な”長～～～い時間”が想像力を刺激し、ノスタルジーをかきたて、感性に訴えてくるからではないでしょうか。

空き家が激増、公共施設が老朽化、自治体に予算が少なくなってくる中、もうすでに、“腐食”と”侵食”がじわじわとまちを襲ってきています。

